

「白道」に寄せるモノローグ

鷺尾 博子

嵯峨野にある寂庵に向かつて丸太町通りを西に進んでいくと、街の中なのにその一帯だけ緑の木々が目立って美しい場所がある。「法金剛院 待賢門院璋子の桜」という山

門に掲げられた文字を横目に見て、いつか訪れてみたいものだと思いつきながら通り過ぎていた。「白道」は花園という美しい名のついた町にあるその場所から始まっていた。法金剛院は西行の出家の原因の一つとされる待賢門院が建立した寺院である。

仏教三部作といわれる「花に問え」「手毬」「白道」は一九八九〜九一年にかけて同時に三誌に連載されている。先生が七〇歳を目前にした時期となる。「恐ろしく無謀なことをした」とは「あとがき」に書かれた先生の言葉であ

る。この「白道」だけは連載が終わった後も五年間かけて書き直している。（しかもこの間に「源氏物語」の現代語訳を始めている。）

「あとがき」に「なぜ彼らは他人目には突如と見える出家の道を選んだのか。自分の出家以来、ずっと私に向って問いつづけられてきた質問に辟易しながら、わたしもまた彼等にその問いを発したくなっていたのだ。明快な答えが自分の内部から出て来ないのにじれて、三人の大先達にその答えのヒントを授かりたいという気持ちが潜んでいたかもしれない」とある。改めて読み直し、この言葉を読み違えていたかもしれないと思う。北面の武士であった西行の出家の原因については研究者の間で諸説あるという。先生は

すでに「自分で発心する出家というものは、明確な一つの原因などあるのではなく、わけもなく不思議な何かにそのかされてそうなり、出家した後に於いて、自分でさえ判然と云い表すことのできない原因を、探し求めつづけることが出家者の生きざまとなっていくように考えられるからである。出家後の西行の動きをたどれば、その説がいつそう明確になっていくと私には思われる。」と書いている。これは（明快な理解というものを余人からは得られないけれど）先生の中には確信に近いものがあつて先人に同意を求めた、ということではなかっただろうか。

西行が生きたのは平安時代末期、やがて保元の乱、平治の乱を経、また平家の盛衰を見て、武家の時代へと移る頃である。一一九〇年、七三歳で示寂している。嵯峨、東山、鞍馬、高野、吉野、熊野、四国、伊勢、陸奥、そして終焉の地である河内弘川寺、西行の足跡をたどり、その地に立ち、「西行の目でじっくりと眺め」、西行が遺した和歌を証として、西行の真情に迫っていく。また、西行とゆかりのあった待賢門院璋子、白河法皇、鳥羽院、崇徳院、後白河天皇、行尊、清盛、藤原頼長、徳大寺実能、季正、西住、寂然、文覚、蓮阿、秀衡、頼朝、文覚、明恵、俊成、定家

等との関わりを膨大な文献から読み解き、西行の人となり を浮かび上がらせていく。

時は行きつ戻りつ、西行を追いかける旅は、過去の人々に出会う旅となつて広がっていく。春、若き日の西行が西住と共に法輪寺に空仁を訪れた描写には「嵯峨野の東の彼方に京の町が低く沈み、市街と嵯峨野の境に屏風を立てたように双ヶ丘のなだらかな背が並んでいる。目の前の曼荼羅山の——」と続き、現代の満開の桜の下に見覚えのある京の街が限りなく美しく俯瞰できたとき、西行の生きた時代とまるでひと続きのようであるかのごとくに見渡せる。

吉野を訪れたのは五月の末で、「樹々はすべて新緑におわれ、強い初夏の陽ざしが翡翠色の陽の雫をしたたらせている。」「いつものように奈良から壺坂、（中略）低い家並みがつづき、ふっとタイムマシンの中に投げ込まれたような気分になる。ここから川沿いに道の両側につづく桜の大樹に花が咲き匂い、ここからすでに花のトンネルで、憂き世から花浄土へ導かれるのだった」。私は西行庵の跡でのこの場面が好きだ。「静寂と幽邃に包みこまれて、軀じゅうが透明になっていくような気がする。（中略）自然にゆるやかにみだがあふれてくる。今に自分も、木か草か、

小鳥に変身していくような錯覚に襲われる。」翡翠色の陽の雫が球体となって膨らみ続け、西行も先生もすべて包み込まれていくような感覚だ。「春風の花を散らすと見る夢は、さめても胸のさわぐなりけり」という歌がつきあげてきて、「青浄土となったこの庵の中に西行の熱い想いがまだこもっているのだろうか」と思うのである。

膨大な量の和歌と資料を丹念に読み起こし、西行の跡を訪ねるうちに、先生はどれほど西行に共振したことだろう。

西行は平家によって焼失した東大寺再興の勧進のために奥州へ向かい、途中、鎌倉で頼朝に逢っている。勧進のための砂金を運ぶ便宜を求めたのであろう、その後平泉からは鎌倉を経由して砂金が京に届けられたという。僧侶で歌人だけではない「才能のある頼もしい実務家」と評される姿は先生と重なる。また、「(非業の死を遂げた)崇徳院に對する哀悼の切実な想いと(敵側の)清盛に對する親近感が矛盾なく同居するのが西行の人間性」とし、「出家したからこそ自分の心のままに振舞える西行の自在無礙の境地であつたかもしれない。」と述べる。また、崇徳院崩御の後ようやく讃岐の地を訪れるという際には「僧侶としての

西行の悟り済まそうとする心を本来の詩人西行の心が厳しく問いつめる。」これらは先生ならではの境地、深い洞察によるものだろう。あるいはまた西往の死に、「手放して悲しみを披瀝して」てらいもなく真情を吐露する歌を詠む姿に感動し、歳のかげ離れた若い明恵や定家との交流は西行の晩年に若い潤いと喜びをもたらし、いつしか西行と先生の姿が重なり合っていく。

死の前年、七二歳の西行が、若い明恵に向って「歌はわが真言なり」と述懐したという。

密教では「真言」とは宇宙を表す大日如来の言葉、真実の言葉である。仏道修行における行法の中で僧侶は真言を唱える。仏と一体となることを求め繰り返し繰り返し行法は続けられる。一体となった瞬間に離れていつてしまうものだからである。

西行六九歳の時、東海道を下る途上、生涯の絶唱ともいわれる二つの歌を遺している。先生もまた六九歳で再度小夜の中山を訪れている。ここでの大自然も西行も先生も渾然一体となった息もつかせぬ描写は圧巻である。

「年たけてまた越ゆべしと思ひきや

いのちなりけりさやの中山」

「風になびく富士のけぶりの空に消えて

ゆくへも知らぬわが思ひかな」

「一筋においもとめてきたものは外でもない。世界にただひとつのわが心、わが思いの真実であったのだ。捕らえたと思つた瞬間、するりと指からすべり抜けているわが思い、わが心の実態は、終に自分にはわからぬまま終わりそうな気がする。（中略）わが心ひとつを凝視し、どこまでも追いつめていく方法こそが、自分の歌を作るといふすきびであった。」先生は「すきび」といい、断ち切れない文学への執着を「煩惱」と言われた。しかしそれは、仏と一体となろうとする仏道修行ととてもよく似ている、と私は思う。

「出家とは生きながら死ぬこと」とはあまりに重く厳しく、これまでその響きには救いを見いだせなかった。しかし「生きながら自分を葬り去る方法はないものと思ひあぐねた時、ふつと、出離せよという声がきこえたのは、み仏が呼ばれたのだ。」という一文にあつたとき、ようやく「生きながら死ぬこと」の意味が私にも理解できたと思えた。

「あながき」に「見るべきものは見たという心境は、虚

無ではなく、限りなく満たされた豊かな手応えを感じさせてくれる。今、『白道』の擱筆に当り、西行の中に自分のすべてが融けこんでしまった一体感を味わっている」とある。確かに先生は豊かな手応えを持って生きたのだと思う。